



## 名訳

昨日の漢詩の授業、  
「送元二使安西」 王維

渭城朝雨浥輕塵 客舍青青柳色新  
勸君更盡一杯酒 西出陽關無故人

の転句「勸君更盡一杯酒」を、「どうかもう一杯飲んでくれ」と訳した●●くんは、なかなかの詩人である。どうも●●くんという人は、こういう場面で実力を発揮する人のようである（担任としては、もう少し考査とか宿題とかで「も」実力を発揮してもらいたところであるが…笑）。

さて、この詩には、歌人でもあり国学者でもあった土岐善麿さんの名訳がある。紹介しよう。かなりの意識ではあるが、よくこの詩の雰囲気を与えている。

里の朝雨 しっとり  
柳若芽も 旅ごころ  
君 重ねよや さかずきを  
関を超えれば 見ず知らず

（『鶯の卵』筑摩書房、1985）

さすがプロだけあって、リズム感と「重ねよや」なんていう言葉遣いは、我々凡人には真似ができないレベルである。

ところで、気づいた諸君もいると思うが、土岐善麿さんは日比谷高校とは浅からぬ関係にある。なにせ、日比谷の校歌（♪星陵我らあり 自由の天地～）の作詞者でもあるからである。Wikipediaを引用しよう。

○土岐 善麿（とき ぜんまろ、1885年（明治18年）6月8日 - 1980年（昭和55年）4月15日）は、日本の歌人・国語学者。

東京府東京市浅草区浅草松清町（現在の東京都台東区西浅草一丁目）の真宗大谷派の寺院に生まれる。東京府立第一中学校（現在の

東京都立日比谷高等学校）を経て、早稲田大学英文科に進み、島村抱月に師事。窪田空穂の第一歌集『まひる野』に感銘を受け、同級の若山牧水と共に作歌に励んだ。

卒業の後、読売新聞記者となった1910年（明治43年）に第一歌集『NAKIWARAI』を「哀果」の号で出版、この歌集はローマ字綴りの一首三行書きという異色のものであり、当時東京朝日新聞にいた石川啄木が批評を書いている。同年啄木も第一歌集『一握の砂』を出し、文芸評論家の楠山正雄が啄木と善麿を歌壇の新しいホープとして読売紙上で取り上げた。これをきっかけとして善麿は啄木と知り合うようになり、雑誌『樹木と果実』の創刊を計画するなど親交を深めたものの、1912年（明治45年）に啄木が死去。啄木の死後も善麿は遺族を助け、『啄木遺稿』『啄木全集』の編纂・刊行に尽力するなど、啄木を世に出すことに努めた。その後も読売に勤務しながらも歌作を続け、社会部長にあった1917年（大正6年）に東京遷都50年の記念博覧会協賛事業として東京～京都間のリレー競走「東海道駅伝」を企画し大成功を収めた。これが今日の「駅伝」の起こりとなっている。（以下略）

なんと「駅伝」までが登場する大人物なのである。ついでだからもう一つ、彼の訳詞を挙げておこう。どの詩の訳か、すぐに分かるはずである。

山また山 鳥はかけらず  
道また道 人かげもなし  
ひとり舟 みの笠の翁  
ひとり釣る 大河の雪

（『新訳杜甫詩選』春秋社、1955）